

自動運転の実証実験 被災地で

仙台・荒浜地区

東北大学などが27日、東日本大震災で津波をかぶり、住宅の跡地が広がる仙台市東部の荒浜地区で、車の自動運転の実証実験をする。過疎地での移動手段の確保や、災害時の避難に活用できないか方法を探る。

約800世帯が暮らしていた荒浜地区は震災で高さ10メートルほどの津波に襲われ、土台を残して住宅も流された。住まいを新たに建てられない災害危険区域に指定され、視界を遮るものはない。工事のトラックが時折、行き来する程度だ。

東北大学未来科学技術共同研究センターは、この場所を使い、開発した1人乗り小型電気自動車を走らせる。全球測位システム（GPS）や360度全方位カメラなどで車の位置を正確に割り出し、決められたルートに沿って時速10〜15キロで走る。加速、ブレーキ制動、ハンドル操作は自動で、緊急時のみ運転手が操作する。

同センターの鈴木高宏教授は「運転が難しくなったお年寄りの移動手段になる車の開発を進めたい」と話す。今後は、雨や雪など悪天候でも周辺の環境を認識して安定した走行ができる技術をめざす。

（船橋）